

副葬される土偶

設 楽 博 己

-
- | | |
|------------|---------------|
| 1. はじめに | 4. 土偶副葬の背景と再葬 |
| 2. 土偶の役割 | 5. おわりに |
| 3. 土偶副葬の系譜 | |
-

論文要旨

縄文時代の代表的な呪具である土偶は、基本的に女性の産む能力とそれにからむ役割といった、成熟した女性原理にもとづく象徴性をほぼ一貫して保持していた。多くの土偶は割れた状態で、何ら施設を伴わずに出土する。これらは故意に割って捨てたものだという説があるが、賛否両論ある。縄文時代後・晩期に発達した呪具である石棒や土版、岩版、岩偶などには火にかけたり叩いたりして故意に破壊したものがみられる。したがって、これらの呪具と関連する儀礼の際に用いたと考えられる土偶にも、故意に壊したものがあつた蓋然性は高い。壊したり壊れた呪具を再利用することも、しばしばおこなわれた。

土偶のもうひとつの大きな特徴は、ヒトの埋葬に伴わないことである。しかし、他界観の明確化にともなつて副葬行為が発達した北海道において、縄文後期後葉に土偶の副葬が始まる。この死者儀礼は晩期終末に南東北地方から東海地方にかけての中部日本に広まった。縄文晩期終末から弥生時代前半のこの地方では、遺骨を再埋葬した再葬が発達するが、再葬墓に土偶が副葬されるようになったり、土偶自体が再葬用の蔵骨器へと変化した。

中部日本の弥生時代の再葬には、縄文晩期の葬法を受け継いだ、多数の人骨を焼いて埋納したり処理する焼人骨葬がみられる。こうした集団的な葬送儀礼としての再葬の目的の一つは、呪具の取り扱いと同様、遺体を解体したり遺骨を焼いたり破壊して再生を願うものと考えられる。つまり、ヒトの多産を含む自然の豊饒に対する思いが背後にあり、それが土偶の本来の意味と結びついて土偶を副葬するようになったのだろう。

そもそも土偶が埋葬に伴わないのは、男性の象徴である石棒が埋葬に伴うことと対照的なありかたを示すが、それは縄文時代の生業活動などに根ざした、社会における性別の原理によって規定されたものであつた。土偶の副葬、すなわち埋葬への関与はこうした縄文社会の原理に弛緩をもたらすもので、縄文時代から弥生時代へと移り変わる社会状況を反映した現象だといえる。